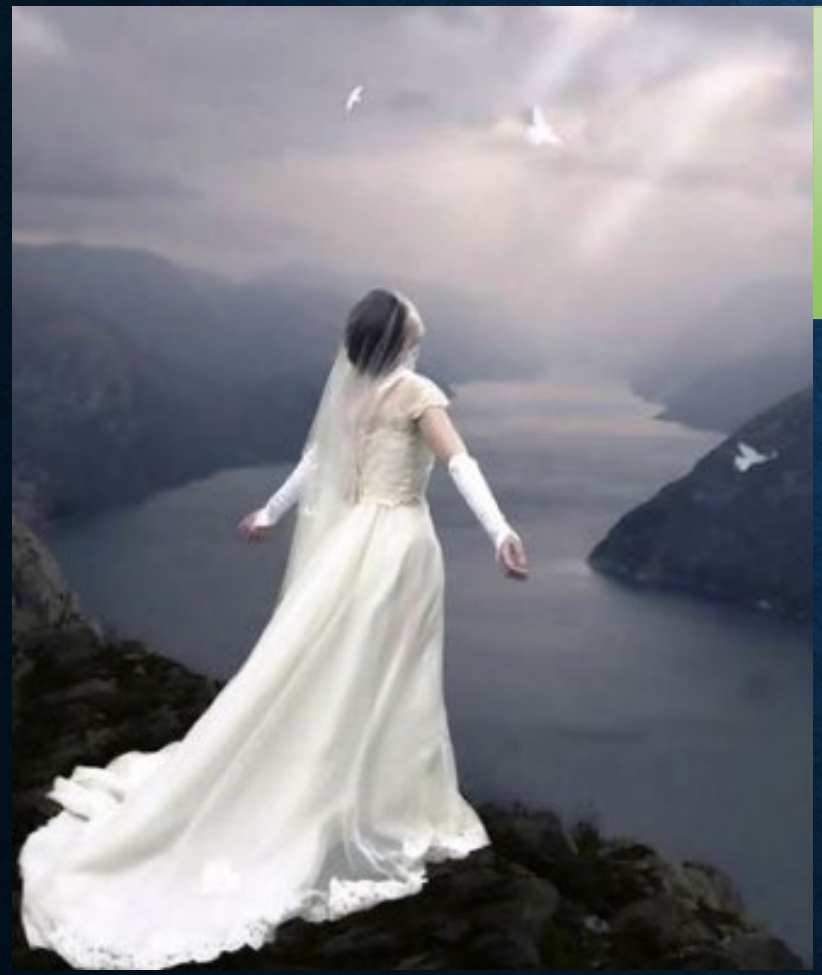
雅歌の学び



(1)「香り」(בְּשָׂמִים)

2023. 1.13

「雅歌」を学ぶ上での大切な視点

1. 花婿キリストとキリストの花嫁との直接的な愛のかかわり
2. 花嫁の霊性は一途に花婿を求め、花婿を知り、
   「生きることはキリスト」「すべてがキリスト」となる
3. 五感によって表象されるかかわりの奥義
   (触覚・嗅覚・味覚・視覚・聴覚)

1.「香料」①

●「雅歌の学び」で最初に取り上げるのは「香り」についてです。幕屋の建造のためにイスラエルの民は多くの物を神に献げましたが、それらの中に数々の「香料」(「ベサーミーム」בְּשָׂמִים)がありました。

【新改訳2017】出エジプト記25章6節
ともしび用の油、注ぎの油と、香り高い香のための香料、

ハッサンミーム　ヴェリケトーレット　ハッミシュハー　レシェメン　ベサーミーム　ラッマーオール　シェメン
שֶׁמֶן לַמָּאוֹר בְּשָׂמִים לְשֶׁמֶן הַמִּשְׁחָה וְלִקְטֹרֶת הַסַּמִּים׃
香り高い　香のための　注ぎの　油のための　香料(複)　灯火のための　油

●「注ぎの油」と「香り高い香」のために「香料」が用いられました。単数は「ベセム」(בֹּשֶׂם)。旧約では単数と複数で30回用いられています。神と人がともに住む幕屋で用いられた香料が、「雅歌」の花婿と花嫁の関係を表すものとなっています。ですから、幕屋の香料について知ることは不可欠なのです。

1.「香料」②

●「注ぎの油」と「香り高い香」のための「香料」が、聖書では①「聖なる注ぎの油」と ②「聖なる香」を作るために用いられています。

①【新改訳2017】出エジプト記30章22～31節

22【主】はモーセにこう告げられた。23「あなたは最上の香料を取れ。液体の没薬を五百シェケル、香りの良いシナモンをその半分の二百五十シェケル、香りの良い菖蒲を二百五十シェケル、24 桂枝を聖所のシェケルで五百シェケル、オリーブ油を一ヒン。25 あなたは調香の技法を凝らしてこれらを調合し、聖なる注ぎの油を作る。これが聖なる注ぎの油となる。26 そして、次のものに油注ぎを行う。会見の天幕、あかしの箱、27 机とそのすべての備品、 燭台とそのすべての器具、 香の祭壇、28 全焼のささげ物の祭壇とそのすべての用具、 洗盤とその台。29 こうして、これらを聖別するなら、それは最も聖なるものとなる。これらに触れるものはすべて、聖なるものとなる。30 あなたはアロンとその子らに油注ぎを行い、彼らを聖別して、祭司としてわたしに仕えさせなければならない。31 あなたはイスラエルの子らに告げよ。これは、あなたがたの代々にわたり、わたしにとって聖なる注ぎの油となる。

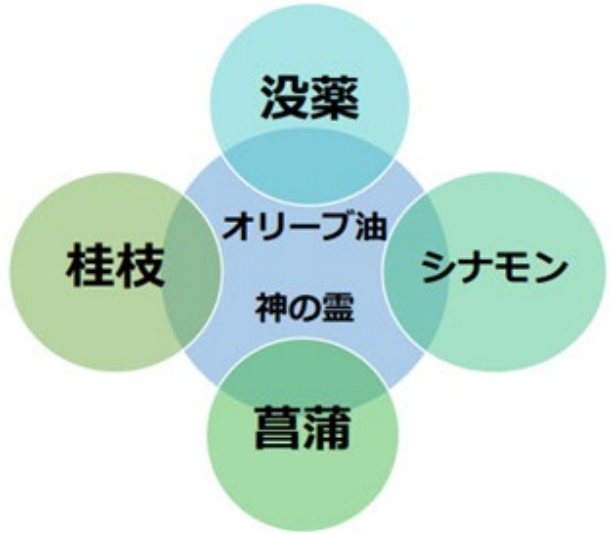
1.「香料」③

②【新改訳2017】出エジプト記30章34～36節
34 【主】はモーセに言われた。「あなたは香料のナタフ香、シェヘレテ香、
ヘルベナ香と純粋な乳香を取れ。これらは、それぞれ同じ量でなければならない。
35 これをもって、調香の技法を凝らして調合された、塩気のある、きよい、
聖なる香を作れ。36 また、その一部を打ち砕いて粉にし、その一部を、
わたしがあなたと会う会見の天幕の中のあかしの箱の前に供える。これは、
あなたがたにとって最も聖なるものである。

●このように、神である主はイスラエルの民が献げた香料を用いて、
①「聖なる注ぎの油」と ②「聖なる香」を作るように命じました。
①は神の民の聖別のため、②は神のためです。つまり、双方の香りによって交わりがなされるということです。このことは非常に重要です。雅歌におけるさまざまな「香り」は、①と②が背景となっています。そしてそれらは、いずれも最も「聖なるもの」であり、「霊的な香り」なのです。

2.「聖なる注ぎの油」の成分 ①

●次に、「聖なる注ぎの油」と「聖なる香」の成分について見てみましょう。



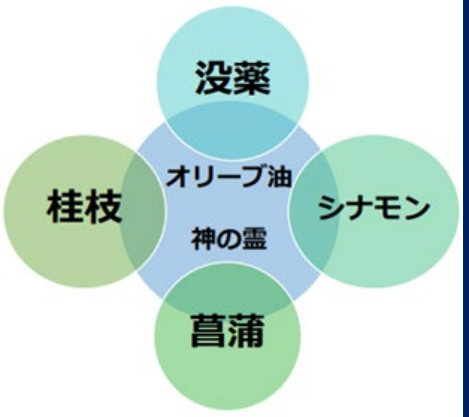
①「聖なる注ぎの油」の成分

「液体の没薬を五百シェケル、香りの良いシナモンをその半分の二百五十シェケル、香りの良い菖蒲を二百五十シェケル、桂枝を聖所のシェケルで五百シェケル、オリーブ油を一ヒン。」とあります。

●ここには「四つの香料」と「オリーブ油」を「技法を凝らして調合」することが語られています。

a「液体の没薬」は「モル・デロール」(מֹר־דְּרוֹר)で「樹脂の苦味」を意味します。苦味は「マル」(מַר)、語源は「マーラル」(מָרַר)で「苦しむ」の意です。没薬は香りの良い木で、傷ついたところから分泌する樹液です。この没薬の香りは甘く、そして味は苦いのです。その証拠に、マタイ27章34節ではこう記されています。

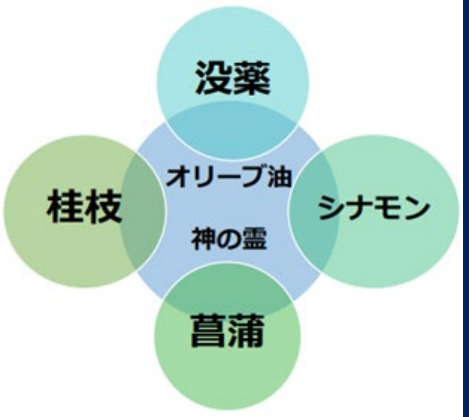
2.「聖なる注ぎの油」の成分 ②



●「・・イエスに、苦みを混ぜたぶどう酒を飲ませようとした。イエスはそれをなめただけで、飲もうとはされなかった」とあります。「苦味を混ぜた」という「苦味」は没薬が入っていたことを示しています。つまり没薬は死の苦痛を和らげる効果があったとされています。しかしイェシュアはそれを飲もうとはされず、十字架の苦痛をまともに受けられたのです。没薬は死と関係があります。また没薬はその香りのゆえに、葬りにも用いられています(ヨハネ19章)。いずれにしても、没薬は主の尊い死を象徴しています。

b.「香りの良いシナモン」は、シナモンを意味する「キンナーモーン」(קִנָּמוֹן)の連語形「キヌモン」(קִנָּמ)と「香料」を意味する「ベセム」(בֹּשֶׂם)とが結びついて「キヌモン・ベセム」(קִנְמַן־בֹּשֶׂם)。シナモンは特有の香りがします。その強い香りはキリストの死における効力を表象しています。

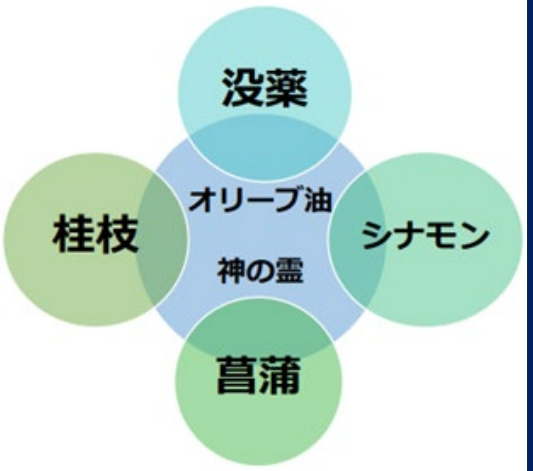
2.「聖なる注ぎの油」の成分 ③



C.「香りの良い菖蒲」は「ケネー・ヴォーセム」(קְנֵה־בֹשֶׂם)で、「菖蒲」は「葦」の一種です。「菖蒲」は沼地や泥沼に生えます。その中で「まっすぐに立つように生えている」ことから、キリストの復活を表しています。ちなみに「菖蒲・葦」を意味する「カーネ」(קָנֶה)の語源は「カーナー」(קָנָה)です。「カーナー」の初出は創世記4章1節で「エバは身ごもってカインを産み、『私は、主によって一人の男子を得た』と言った」の「得た」に使われています。「カイン」(קַיִן)は「カーナー」と同語根です。また「得た」と「産んだ」が同義であり、「御父が御子を生んだ」(詩2:7)が「復活」を表す表現であることからも、「菖蒲」はキリストの復活を意味していると言えます。

d.「桂枝」は「キッダー」(קִדָּה)でシナモンと同科です。シナモンは樹皮の内側からの樹脂ですが、桂枝は樹皮の外側の部分です。いずれも香りが強いのが特徴です。桂枝は虫や蛇を追い払う駆逐剤として用いられると言われます。つまり、それはキリストの復活の効力を表わしていると言えます。

2.「聖なる注ぎの油」の成分 ④



●まとめると、「没薬」と「シナモン」はキリストの死の象徴であり、「菖蒲」と「桂枝」はキリストの復活の象徴です。そして、いずれもそれは甘い香りなのです。
これらの四つの香料にオリーブ油が加えられます。「オリーブ油」は「神の霊」を象徴します。これらをミングリングして(調合して=「ラーカハ」רָקַח)「聖なる注ぎの油」を作り、幕屋のすべての器具と祭司たちに油注ぎをすることで、それに触れたものはすべて聖とされるのです。この複合された「聖なる注ぎの油」こそが「いのちを与える御霊」(Ⅰコリント15:45)なのです。

聖なる注ぎの油 = いのちを与える御霊

2.「聖なる注ぎの油」の成分 ⑤

●イエシュアが復活した後、「いのちを与える御霊」となられたのは、私たちがこの「いのちを与える御霊」によって生きるためです。そのためには、イエシュアの40日間に及ぶ顕現の意義を私たちは理解すべきです。その意義とは「霊によって生きる」ことを弟子たちに学ばせるためでした。

●弟子たちは「いのちを与える御霊」によって、イエシュアが40日間の顕現の中で再び語った「御国の福音」を、「祭司」として正確に理解したのです。それだけでなく、神が相互内在の神であること、また同時同存の神であることも理解したはずです。「聖なる注ぎの油」である「いのちを与える御霊」が、何と甘い香りであったかを思わせられます。

2.「聖なる注ぎの油」の成分 ⑥

●死からよみがえられたイエシュアは、弟子たちを「王なる祭司」とするために、以下のように、二つの「聖なる油注ぎ」を与えました。

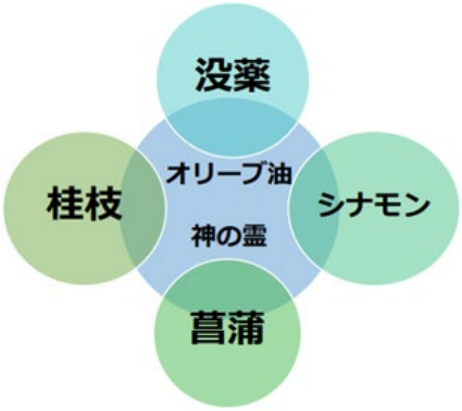
(1) 息を吹きかけて、いのちを与える御霊を与えた(復活後)

●これが「祭司としての油注ぎ」です。これによって弟子たちのうちにある霊の機能が回復し、イエシュアの語った御国の福音を正しく理解することが出来ました。花嫁はこの「祭司としての油注ぎ」を与えられているのです。

(2) 権威としての聖霊を与えた(五旬節の時)

●これは「王としての油注ぎ」です。つまり「力としての聖霊」を意味します。これが上から(=神の右の座から)臨むことで、キリストの証人となる権威の力が賦与されたのです。罪を赦すためにも権威が不可欠です。「証人」と訳されたギリシア語の「マルテュース」(μάρτυς)は「殉教者」という意味があります。花嫁はこの「王としての油注ぎ」をも与えられているのです。

3.「聖なる注ぎの油」の量



●「聖なる注ぎの油」の量についても考えておきましょう。
(1)「没薬」500シェケル　(2)「シナモン」250シェケル
(3)「菖蒲」250シェケル　(4)「桂枝」500シェケル

●この比率は何を意味しているでしょうか。
(2)と(3)を合わせると500シェケルとなるということは、香料は三つの500シェケルが存在することになります。「五」という数は人の責任を表わす数です。ということは、「五」が表すイェシュアの人性の中に、「三」という神性が含まれていることを示しています。「聖なる注ぎの油」に含まれる四つの香料そのものが、イェシュアの死と復活を表しています。Ⅰヨハネの手紙にある「聖なる方からの注ぎの油」(2:20)、「御子から受けた注ぎの油」(2:27)とは、この「聖なる注ぎの油」のことを指して言っているのです。

4.「聖なる香」の成分 ①

②「聖なる香」の成分

●香料の〔ナタフ香、シェヘレテ香、ヘルベナ香〕 ＋ 〔純粋な乳香〕 ＝３：１

三は常に三一の神の数です。四は被造物で、ここでは人を表す数です。三一の神が人となったこと、神性の三が一となって人の中へともたらされることを意味します。つまりこれはイエシュアを意味します。イエシュアは人となられた神そのものです。四のすべてが調合(ミングリング)されて「聖なる香」を生み出します。

●ナタフ香(没薬)とヘルベナ香は植物のいのちからのもの。シェヘレテ香は動物のいのち(貝類の一種/紅海の沼地で育った貝)からのものです。いずれも死を表象しています。これらはヨハネによって啓示されています。動物は「見よ、世の罪を取り除く神の子羊」(1:29) とあるように、贖うためには動物のいのちが不可欠。

植物は「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。」(12:24)とあるように、実を結ぶためには植物のいのちが不可欠です。

4.「聖なる香」の成分 ②

●ヘルベナ香は樹木から得られる樹脂で、匂いがきわめて強く不快なものですが、これには他の香りを強化し持続させるという不思議な機能があります。もう一つ、虫や有毒な這うものを駆除し追い払うという効用があります。これはキリストの死を意味しています。そのような観点から、ナタフ香(没薬)、シェヘレテ香、ヘルベナ香の三つはキリストの死を表象し、乳香はキリストの復活を表象しています。

4.「聖なる香」の成分 ③

●このように、「聖なる注ぎの油」だけでなく、「聖なる香」の四つの成分も、同じく「キリストの死と復活」を表しています。ただし「聖なる香」の四つの成分には、「聖なる注ぎの油」の成分に見られたような量についての記載は何もありません。むしろ四つの成分に「塩」が加えられることが特徴的です。その「塩」とはキリストの死と復活の不変性と奥義性とを表しています。この香は物や人ではなく、神が享受するものです。

●「キリストの死と復活」を表している「聖なる注ぎの油」と「聖なる香」こそが、「甘い香り」(キリストの香り)なのです。

5.「雅歌」における香り ①

●「雅歌」には、花婿と花嫁を香料によって表している箇所が多く見られます。「香り」は特定の存在を指し示しますが、花嫁の「香り」は生来のものではなく、あくまでも花婿から移された香りだということです。

① 1章3節
あなた(花婿)の香油は香り芳しく、あなたの名は、注がれた香油のよう。

② 1章14節
私の愛する方(花婿)は、私にとって、エン・ゲディのぶどう畑にあるヘンナ樹の花房。

③ 4章13～14, 16節
13あなた(花嫁)の産み出すものは、最上の実を実らせるざくろの園、ナルドとともにヘンナ樹、 14 ナルドとサフラン、菖蒲とシナモンに、乳香の採れるすべての木、没薬とアロエに、香料(בְּשָׂמִים)の最上のものすべて、16 北風よ、起きなさい。南風よ、吹きなさい。私の庭に吹いて、その香り(בְּשָׂמָיו)を漂わせておくれ。・・・

④ 7章11節
さあ、私の愛する方(花婿)よ。私たちは野に出て行って、
村(第三版では「ヘンナ樹の花の中で」)で夜を過ごしましょう。

5.「雅歌」における香り ②

※「ヘンナ樹の花」は今日も死海西岸のエン・ゲディに多く生息している花です。香りのよい花で、白く黄色を帯びています。「ヘンナ樹」は「コーフェル」(כֹּפֶר)で「贖い金、代償、身代金、やに(タール)」を意味します。ノアの箱舟の板の内側にも外側にも塗って水の侵入を防いだタールが「コーフェル」で、復活を意味します。

※4章13節の「あなたの産み出すものは、・・・・ナルドとともにヘンナ樹」とあります。「ナルド」は「没薬」で死を意味し「ヘンナ樹」は復活を意味する表象です。また14節の「菖蒲とシナモン」はキリストの復活と死を意味し、「乳香」は復活、「没薬」は死、「サフラン」と「アロエ」(沈香)は復活を意味します(イザヤ35:1/ヨハネ19:39)。いずれにしても「死と復活」の香りです。

5.「雅歌」における香り ③

⑤ 5章1節
わが妹、花嫁よ、私は私の庭に入った。私の没薬を、私の香料とともに集め

⑥ 5章13節
頬(花婿)は香料(הַבֹּשֶׂם)の花壇のようで、良い香りを放つ。
唇はゆりの花。没薬の液を滴らせる。

⑦ 6章2節
私の愛する方(花婿)は、自分の庭へ、香料(הַבֹּשֶׂם)の花壇へ下って
行かれました。園の中で群れを飼うために、ゆりの花を摘むために。

⑧ 8章14節
私の愛する方(花婿)よ、急いでください。
かもしかのように、若い鹿のようになって、香料(בְּשָׂמִים)の山々へと。

今回のまとめ

【新改訳2017】雅歌 4章10節
私の妹、花嫁よ。あなたの愛は、ぶどう酒にまさって麗しく、
あなたの香油の香りは、すべての香料にまさっている。

ミッコル・ベサーミーム　シェマーナイフ　レーアッハ

רֵיחַ שְׁמָנֶיךָ מִכָּל־בְּשָׂמִים׃

あらゆる香料よりも　あなたの香油の　香り

※「香り」の「レーアッハ」(רֵיחַ)と「霊」の「ルーアッハ」(רוּחַ)は同語根です。

●10節の動詞は「麗しい」(=美しい)と訳された「ヤーファー」(יָפָה)だけです。花婿は花嫁に対して、「あなたの香油の香りは、すべての香料にまさって麗しい」と語っています。その香油の香りとは、花婿キリストが与える「聖なる注ぎの油」のことであり、「いのちを与える御霊」のことなのです。この香油の香りこそ、きわめて甘い香りであり、芳しい香りなのです。